審査の結果の要旨

氏名　榊　美知子

憂鬱な気分になると悲しい経験を思い出すという日常経験からもわかるように、記憶の想起は感情によって大きな影響を受ける。本研究は、感情と一致する記憶の想起が促進されるという「気分一致効果」と、感情と逆の記憶の想起が促進されるという「気分不一致効果」の生じる要因と心理的メカニズムを明らかにしようとする実験心理学的な研究である。第Ⅰ部の第 1 章・第 2 章では、感情、および感情が自伝的記憶の想起に及ぼす影響に関する心理学的研究を概観し、これまでの研究では、もっぱら、自伝的記憶の知識構造の果たす役割を検討するものとしている。

第Ⅱ部では、本研究の前提となる自伝的記憶の知識構造に関して、自己概念との関連をもとに検討している。先行研究において、Klein と Loftus（1993）は、自己概念と自伝的記憶は独立に保持されていることを主張してきたが、第 3 章～第 7 章では、彼らの研究の問題点を指摘し、自己概念は自伝的記憶と関連づけられて保持されていることを示した。具体的には、課題促進パラダイムを用いた場合（第 3 章）、プライミング方を利用した場合（第 4 章）、知覚的処理の効果を統制した場合（第 5 章）、意味的知識の影響を考慮した場合（第 6 章）のそれぞれにおいて、自己概念にアクセスすると、関連する自伝的記憶の想起が促進されるという結果が認められた。これらの知見から、自伝的記憶は関連する自己概念のもとに構造化されている可能性が示唆され(第 7 章)、自己概念が、家族、勉強、仕事、友人関係などのテーマごとに分かれた構造を持つと考えられていることから、自伝的記憶も同様の構造を持つと推察された。第 8 章ではイベント手がかり法を利用して、この点について検討を行い、自伝的記憶もテーマごとに分かれた領域構造を持つことを示した。また、階層線形モデルによる分析を行ったところ、それぞれの領域が感情と特異的に連合していることが示され、感情が自伝的記憶に及ぼす影響は、自伝的記憶の領域構造によって媒介されている可能性が示唆された。

第Ⅲ部では、自伝的記憶の領域構造が、気分一致効果と気分不一致効果に及ぼす影響について検討を行った。まず第 9 章では、ポジティブ気分時について検討し、感情を喚起した状況と関連する「状況関連領域」から記憶を想起すると気分一致効果が生起するのに対して、感情を喚起した状況と無関連な「状況無関連領域」から記憶を想起した場合には、気分不一致効果が生起することを示した。こうした結果は、ネガティブ気分時においても（第 10 章）、日常的な記憶想起に近い自由再生法を用いても（第 11 章）、同様に得られた。

自伝的記憶は個人の人生経験を反映するものであり、自伝的記憶の領域構造には大きな個人差が想定される。そこで第Ⅳ部では、自伝的記憶の領域構造の分化の程度を表す「自己複雑性」が気分不一致効果に及ぼす影響を検討した。第 12 章では、ネガティブ気分時について、自己複雑性の高い人ほど、気分不一致効果が生じやすいことが示された。第 13 章では、気分緩和動機の効果を統制しても、自伝的記憶の知識構造の個人差が気分不一致効果に影響を与えることが明らかになった。第 14 章では、ポジティブ気分時においても同様の結果を得ている。

上記のように、本研究は、感情が想起に影響を及ぼすメカニズムを理論的に検討し、詳細な心理実験を通して自伝的記憶の知識構造に関する基礎的な知見を得るとともに、感情の自己制御に関する研究分野にも大きな示唆をもたらすものと考えられ、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達している論文として評価された。